大学と美術館の協働による文化事業の展開
－造形ワークショップ『みんなで描くハニカムタウン』の実践から－

〔事業責任者〕
（自治体等側）茨城県近代美術館天心記念五浦分館・企画普及課長
荒木　扶佐子
（大学側）茨城大学教育学部・准教授
片口　直樹

連携先

茨城県近代美術館天心記念五浦分館

プロジェクト参加者

荒木扶佐子（茨城県近代美術館天心記念五浦分館・企画普及課長　担当：事業の企画・運営）
富永　京子（茨城県近代美術館天心記念五浦分館・首席学芸主事　担当：事業の企画・運営）
片口　直樹（茨城大学教育学部・准教授　担当：事業の企画・運営）

プロジェクトの実施概要

１　プロジェクトの目的

本事業は「地域の教育力向上」及び「学術文化の推進」を目指した大学と美術館の連携による造形ワークショップ活動の実践である。具体的には，教育学部教員（画家）と外部講師（映像作家）が茨城県天心記念五浦美術館を舞台に地域の子どもを対象とした造形ワークショップ『みんなで描くハニカムタウン－六角型キャンバスをつなげて街をつくろう－』を実施する。最終的に，完成した絵画・映像作品を美術館が企画する『入江明日香－心より心に伝ふる花なれば』展の期間中に館内で展示することにより，来場者へ訴求することはもとより，企画に参加した子どもたちへの活動内容の振り返りの場を提供することを目的としている。

また，事業責任者は連携事業を 3 年間かけて実施する計画を立てており，今年度は 2 年目の実施となる。昨年度企画した造形ワークショップ『金屏風に花が咲く』の成果と反省をもとに，本事業の展開を図るとともに，次年度の取り組みに向けた省察も行う。継続した取り組みにより，大学と美術館間の有効な連携の在り方を探るとともに，課題を抽出することも目的とする。

２　連携の方法及び具体的な活動計画

美術館側は，大学側責任者とともに事業の企画・立案を行い，実施に向けた運営を行う。具体的には，ワークショップがスムーズに行えるように場所の設定や画材・道具の準備等を行い，活動の環境を整える。さらに，完成した作品の展示台の製作，設営を行う。また，来場者への対応や外部への広報を担当する。

大学側は，美術館側責任者とともに本事業の具体的な活動内容の企画・立案を行う。また，事前準備と事業当日の進行を担当する。他に，外部講師や補助学生の手配，映像作品の制作や展示構成及び展示作業等を担当し，本事業の趣旨を広く伝達させることに努める。

大まかな活動計画は以下のとおりである。

○4 月中旬…事業の企画・立案
○6 月初旬…事業内容の確定
○6 月 29 日…事業の実施
○7 月 23 日～9 月 1 日…完成作品展示会
○10 月上旬…事業のまとめ

３ 期待される成果

事業を通して期待される主な成果は，①活動参加者（児童・生徒）の学校外美術体験による創造力の向上，②活動補助者（教育学部学生）の将来的な教育力の向上，③作品展示による鑑賞者へ向けた新たな美的感性の訴求，④大学及び美術館の地域貢献，研究・教育力の伝達，の四点である。

プロジェクトの実施成果

１ 活動実績

(1) 造形ワークショップの実践

【題名】みんなで描くハニカムタウンー六角型キャンバスをつなげて街をつくろうー

【日時】令和元年 6 月 29 日（土）
午前 10 時30 分〜午後 2 時30 分

【場所】茨城県天心記念五浦美術館講座室

【講師】片口直樹（大学教員）
横田将士（映像作家）

【対象】小学生 21 名

【内容】参加者それぞれが六角型のキャンバスに絵を描き，それらをつなげることにより一つの大きな街を創出させる造形ワークショップ（図１）を実施した。参加者に対して，活動後に講師の一人である横田氏が絵画を映像作品化することを事前に伝え，絵画と映像の関連を意識しながらイメージすることを指示した。また，完成作品（絵画・映像）は美術館内で展示することを前提とした。

活動は，午前の部（１時間半）と午後の部（１時間半）に分けて行った。まず，午前中にモダンテクニック（デカルコマニー・ドリッピング・スタンピングなど）を応用した絵の具遊びを行い，「街を構成するもの」の素材となる色紙を各自で複数枚制作させた（図２）。活動の途中で大きな画用紙を準備し，5〜6 名が共同して一枚の色紙を完成させたことが， 参加者同士のつながりを意識させることにつ ながった。その際に使用したローラーは，よ り多様な絵の具表現を創出させるものとなった。参加者が画材に親しみを感じながら，色彩と形の魅力を再発見し，午後の制作に向けて想像力を膨らませることとなった。

続いて，午後は午前中に制作した色紙を利用して「街を構成するもの」の制作を行った（図３）。街を構成するものとして，2 種類（動くものと動かないもの）制作し，コラージュの技法により六角型キャンバスに描くこととした。事前に様々なパステルカラー調で下地材を塗布した六角型キャンバスを準備し，参加者それぞれが好みのキャンバスを選択した。参加者それぞれが想像した住みたい街をもとに，キャンバス上に，そこに暮らす生きものや建物など，思い思いの絵が描かれていった。

最後に，参加者全員で六角型キャンバスの辺をつなぎ合わせていき，一つの大きな絵画作品として完成させた。その場で簡単な講評会を行い，展示会で発表される映像作品について案内し，活動を終了した（図４）。

図１ フライヤーに使用した活動イメージ

図２ 午前の活動の様子

図３　午後の活動の様子

図４　完成した作品と参加者による記念撮影

(2) 造形ワークショップ作品の展示

【題名】みんなで描くハニカムタウンー六角型キャンバスをつなげて街をつくろうー

【期間】令和元月 7 月 23 日（火）～
9 月 1 日（日）

【場所】茨城県天心記念五浦美術館ロビー

【設置】連携先のご尽力（図５）により，作品に相応しい展示台とモニターの設置が可能となった。来場者へ訴求する上で効果的な要素となった。

【内容】ワークショップ活動で制作した絵画作品（21 枚+5 枚）と，絵画作品をもとに制作した映像作品（DVD 2 分）を，太平洋が一望できる企画展入口前に並置して展示した（図６）。

映像（図７）は，ワークショップ活動のコンセプトを反映させたものであり，絵画と対応させることで，「動き」を意識させた講師の企図と，参加者の想像力について訴求する役割を持った。

また，活動の記録媒体として DM を製作し，鑑賞者に配布した。他に，感想ノートを設置し，来場者と参加者のそれぞれの感想を抽出することとした。

図５　連携先職員による展示台製作の様子

図６　作品展示の様子

図７　映像作品展示の様子

２ プロジェクトの達成状況

⑴ 活動参加者のアンケートからの考察

ワークショップ活動後に簡単なアンケートを実施したが，活動内容について参加者のほとんどが「楽しかった」と回答した。特に，絵の具を大胆に使用した色紙制作や，最終的に参加した全員で大きな作品（街）になったことが理由として挙げられた。

また，保護者の感想の中に，「子どもたちが楽しく作業している姿を見られてよかった」「子どもが好きなことを作品にできる機会があることはありがたい」というものがあった。参加した子どものみならず，保護者にとっても充実した活動になったと思われる。

他にも，映像作品を鑑賞した参加者からは，「思っていた通りにうごいていてうれしかった」「作品の外まで動いていて驚いた！」といった感想があった。イメージした「動き」との関連を，体験的に考察する機会となったことなどがうかがい知れた。

これらにより，期待された成果①「活動参加者の創造力の向上」が達成されたと考える。

⑵ 作品鑑賞者の感想ノートからの考察

ワークショップ作品展示期間中に，来場者が自由に感想を記入できるよう「感想ノート」を設置した。多くの記入があり，そのほとんどが好意的なものであった。作品を称賛する内容が多く，「次回参加したい」といった意見も多々あった。その内容からは，絵画作品と映像作品を並置することで，制作した子どもたちの様子が鑑賞者にも想起されていたことがうかがえた。また，作品への好意的な意見に加え，継続的な本取組みを称賛する意見もあった。大学と美術館による新たな取組みが，少しずつ浸透していることが推察できる。

以上により，期待された成果③「新たな美的感性の訴求」が実現できたものと考える。

⑶ 活動全体を通して

本事業の目的の一つである「学術文化の推進」について，これまでで触れたように，ワークショップ活動とそれによる作品展示の実践によって，社会に一定の成果を示すことができたと推察する。本事業の全容は「茨城県近代美術館だより／No.115」（発行：令和元年12 月 20 日，茨城県近代美術館）で報告されており，期待された成果④「地域貢献，研究・教育力の伝達」が果たされたと考える。

活動後には，本事業で制作した映像作品をWeb 上で公開しており，不特定の閲覧者に向けて，活動の趣旨を訴求することができている。これにより，参加者にとっての振り返り活動が今後も可能となるようにしている。

大学と美術館が双方の資源を活用し，協働により研究・教育力を発揮した姿を訴求することができたと考える一方で，本事業のもう一つの目的である「地域の教育力向上」については課題が残った。当初は教育学部学生を複数名参画させ，活動補助者として関わらせる中で，教育力の向上を図る予定であった。しかし，積極的な参加者は，昨年度同様に院生１名のみであった。参加した院生にとっては学びの多い機会となったものの，期待された成果②「学生の将来的な教育力の向上」を十分に果たせたとは言えない。

３ 今後の計画

今後の計画としては，プロジェクトの目的で述べたとおり，３年間の継続した取組みとして，次年度に完結させる予定である。活動のスタイルを維持しつつ，より充実した造形ワークショップの実施はもちろん，３年間の取り組みを「造形ワークショップ展示報告会（仮）」として，展覧会という形で社会に訴求したいと考えている。

大学と美術館が連携して取り組むことが本プロジェクトの意義であると捉えているため，より強固な協力体制を整えながら，検討を進めていく所存である。